

# 梅枝の巻の薰物合わせと仁明帝

藤河家 利 昭

## はじめに

『源氏物語』と仁明帝の時代との関わりについては、桐壺の更衣と光源氏の物語において、仁明帝女御藤原沢子が際立った寵愛を受けながら、にわかに重病を得て里邸に帰るとともに亡くなったこと、また天位に登る相があると考えられた、皇子時康親王が後に光孝帝となったことなどが踏まえられているという指摘がある。<sup>(注1)</sup>

ここでは、梅枝の巻の薰物合わせについて、そこに仁明帝の薰香への関わり及びその伝わり方がどのように映し出されているかを見ることによって、『源氏物語』における仁明帝とその時代の持つ意味を考えてみたい。

## 一 仁明帝御禁制の方

明石の姫君の裳着と春宮入内を前にした正月下旬の暇のある頃、源氏は薰物を合わせる。その時に大宰大式の奉った香木がやはり昔の物には劣っていると考え、二条院の倉を開けさせ、唐の物を取り寄せて古い物を好ましいと思う。また、裳着の料に、故桐壺院の御代の初期に高麗人が献上した綾、緋金錦などを見立てて作らせる。香木は昔と今の

を取り揃えて御方々に配る。このような源氏の古い物を尊重する姿勢のもとに薫物合わせは行われている。

大臣は、寝殿に離れおはしまして、承和の御いましめの二つの方を、いかでか御耳には伝へたまひけん、心にしまして合はせたまふ。上は、東の中の放出に、御しつらひことに深うしなさせたまひて、八条の式部卿の御方を伝へて、かたみにいどみ合はせたまふほど、いみじう秘したまへば、「匂ひの深さ浅さも勝負の定めあるべし」と、大臣のたまふ。

(梅枝 三・三九八)<sup>(注2)</sup>

「承和の御いましめの二つの方」について、諸注等<sup>(注3)</sup>によれば、仁明帝が禁制とされた二種の薫物、即ち黒方と侍従の調合法であり、その御禁制とはそれを男に伝えてはならないことである。また、その御禁制があるから、どうして源氏が耳に伝えたのであろうかとするのである。源氏の伝えた二つの方の中、一つが侍従であることは、後の薫物合わせの判定のところに、「侍従は、大臣の御は、すぐれてなまめかしうなつかしき香なりと定めたまふ。」(四〇〇・二)とあることから裏付けられる。源氏が男に伝えるなどという薫物の調合法をどういう伝えか耳にしてあえて調合するところに、仁明帝の方への並々ならぬこだわりが見られる。これは先の桐壺院の初期の時代への回帰志向とも関わっているであろうか。

仁明帝の方とその伝わり方を知るために、改めて『河海抄』から検討してみたい。同抄は、「そんな王の御いましめのふたつのほう」の本文について、古本に「そんな」とあるのを不審とし、「そうわの御いましめ」と書くべきであるとした上で、

合香秘方云鳥方

沈大四両 丁子大二両 白檀大一分 丁香大一両<sup>或大二分加之云々</sup> 麝香大一分 薫陸大一分

拾遺方

沈大四兩 丁子大二兩 甲香大一兩 甘松一兩 熟鬱金小一兩一説入麝香 説用黃鬱金 占唐一分  
 蜜和研合搗三千杵炮甲香以和蜜塗之令黑黃不得過黑此兩種方不伝男耳是承和仰事也 延喜六年二月三日故典侍滋  
 野直子朝臣献方也

(四四〇—二)  
(注4)

と、『合香秘方』を引き、「烏方」(黒方)と「拾遺方」(侍従)の香木の分量及び調合法を示し、この二つの方は男に伝えてはならないとする仁明帝の仰せ事があつたとする。これによると御禁制の二つの方は、現代の注等の一部に言う黒方と侍従そのものではなく、その独自の香木の分量と調合法のことである。また、延喜六年(九〇六)二月三日に女である故典侍滋野直子朝臣が献じた(注3)『原中最秘抄』下の言うように醍醐帝にであらう)とするのは、仁明帝の仰せ事がその時まで守られてきたことを示すのであらう。そして、その仁明帝の二つの方自体も秘方として尊重されてきたのであらう。梅枝の巻において、仁明帝御禁制の方が持ち出されたのもそのような時代の空気を反映していると考えられる。延喜・天曆准拠説をとる『河海抄』にとっては、これが醍醐帝の時代であることが重要な意味を持つた筈である。

仁明帝御禁制の方については、『薰集類抄』上にも、「侍従」の八条宮の方を上げるところに、

沈四兩。 丁子二兩。 甲香一兩。 甘松一分二朱。

沈四兩。 丁子二兩。 甲香一兩。 已上大。 甘松一兩。 熟鬱金一兩。 已上小。

一説。入(注5)麝香。一説。黄鬱金。或加(注6)占唐小一分。合(注7)六種。而此本無之。和(注8)蜜合令搗三千杵杵。此二方者不レ伝男。是承和仰事也。延喜六年二月三日。典侍滋野直子朝臣所レ献也。

(五三〇)  
(注5)

とあり、『河海抄』の記事と重なるところがある。ただ、「此二方」は、侍従の二つの調合法なのか、侍従と黒方の二つなのかはつきりしないし、調合法も簡略である。「黒方」の八条宮の方を上げるところにも、

沈四両。 丁子二両。 白檀一分。 甲香一両二分。或大一両。 麝香二分。或一両。 薰陸一分。已上大。

或云。至要方也。延喜六年二月三日典侍滋野直子朝臣所<sub>レ</sub>献也。

(五三三)

とあり、『河海抄』と香木の分量が似ている。侍従と同様に延喜六年に献じられていることから、仁明帝の仰せ事は侍従と黒方の二つについて言うものと考えられている。(注九)

また、『後伏見院宸翰薰物方』には、「薰物可合様」のところに次のようにある。

かいかうあぶるべき事。きよき酒にひたして。今日の午の時ばかりにひたして。またの日の午の時ばかりに取出してあらひてむらなくこそげて。あまづらの煎じたるをいと薄くぬりて。よきかみをしきて。火をうつみてあぶるべき也。くろきなる程にあぶるべし。くろきかたにはすぐすまじ。承和<sub>仁明</sub>の御門の様には。をのこ<sub>注八</sub>にはなつたへそとぞ。うげいのないしのすけのほうにある。

(五六九)

甲香を炮する方法について、『河海抄』所引の『合香秘方』の言うところと共通点がある。「うげいのないしのすけ」は滋野典侍のことと考えられる。これによると、甲香を炮する時に黒く黄色くなる程度に、また黒くなり過ぎないようになどという微妙な加減を必要とすることから、男に伝えてはならないとする戒めが出てきたのであろうか。

次に、物語本文に仁明帝の名は出ないが、同じく薰物においてその例が守られている記述がある。

かのわが御二種のは、今ぞ取う出させたまふ。右近の陣の御溝水のはとりになずらへて、西の渡殿の下より出づる、汀近う埋ませたまへるを、惟光の宰相の子の兵衛尉掘りてまゐれり。宰相中将取りて伝へまゐらせたまふ。

(四四二)

これも諸注等<sub>注九</sub>が指摘するように、宮中では仁明帝の時以来、薰物を紫宸殿の西にある校書殿東廂の右近の陣の御溝水の辺りに埋めるのが慣わしになっていた。源氏はそれに準じて六条院の西の渡殿の下から流れ出る遣水の辺りに埋め

たのである。これは『河海抄』の説に依っている。

承和御時右近陣の御溝の辺の地にうつまる後代相伝して其所をたかへす云々

(四四二)

これも『薫集類抄』下の「埋日数。付埋所」に次のようにある。

同御時。(注：承和) 被<sub>レ</sub>埋<sub>二</sub>右近陣御溝辺地<sub>一</sub>。後代相伝不<sub>レ</sub>変<sub>二</sub>其処<sub>一</sub>云々。或記云。右近陣御溝詹下壇上云々。

(五五〇)

また、『後伏見院宸翰薫物方』にも次のようにある。

承和御門は。右近陣のみかは水のほとりにうつませ給ける。その所はかはらずとあり。

(五六九)

仁明帝が右近の陣の御溝水の辺りに埋めたのは、侍従と黒方を始めとする仁明帝の方のことであろう。それが後に宮中で行われる薫物を埋める際の慣例となったと考えられる。この部分は宮中の慣わしに従っただけかも知れないが、一方では、「承和の御いましめの二つの方」と相俟って、源氏は一貫して薫物の名人としての仁明帝を尊重しているとも言えよう。

## 二 本康親王の方

源氏に対して、紫の上は、「八条の式部卿の御方」、即ち、仁明帝皇子で、薫物の名人と言われた八条の式部卿本康親王の方を伝えて調合する。諸注によれば、親王は仁明帝の方を伝えたとされ、この場合、その方は同じく黒方と侍従である。そして、男に伝えてはならないとする仁明帝の仰せ事からすれば、女である紫の上の方が源氏より正統を伝えているということになる。親王の方は黒方と侍従であるとしても、後に「対の上の御は、三種ある中に、梅花は

なやかに今めかしう、すこしはやく心しらひをそへて、めづらしき香加はれり」(四〇一)とあるので、紫の上が伝え  
て調査したのは、黒方、侍従の外に梅花が加わっている。親王の方にも『薫集類抄』に梅花、侍従、黒方の三種が見  
えることが指摘されている。(注10)

ここでも『河海抄』を改めて見ておく。

本康親王一品式部卿 号八条宮 仁明天皇第七御子  
母從四位下紀種子名虎女延喜元年薨高名薫物合也

黒方 沈四両 丁子二両 甲一両 薫二両 鬱金二両

又侍従 沈四両 丁子二両 甲一両 麝二分 薫陸二分 甘松二分 件二方故八条宮方云々 (四四一)

と、黒方と侍従を親王の方とすることから、物語の仁明帝御禁制の二つの方と本康親王の方とはいずれも黒方と侍従  
と見ていることになる。ただ、二人が帝とその皇子であることは言っているが、その間に伝えがあったと言っている  
訳ではない。むしろ、この二つの方を親王の方とすることから、仁明帝の方とは別と考えているようである。なお、  
親王は仁明天皇第五皇子、母は從四位上滋野繩子(貞主の娘)とすべきである。(注11)『河海抄』は、親王についても、「延  
喜元年(九〇二)薨」として醍醐帝の時まで存命であったことに関心を持っているのであろう。

また、『花鳥余情』は次のように述べている。

八条式部卿本康親王は仁明天皇の第五子母は從四位上滋野温子參議貞主女也 源氏の君のあはせ給はうとむらさ  
きのうへのほうとともにし、う黒方也 いづれも承和の御いましめの方なればかはるべきやうあるへからす た、  
しみなもとはおなし説なれともちのちにちとつ、その人の意巧によりて加減する事あるによりて次第にかはる  
事のある物也 八条式部卿宮は紫上の父式部卿宮になすらへていへり 又兩種方は不伝男と承和御門の御いまし  
め方の方松枝にのせたれば紫上の正説にすへき也 これによりて源氏君のあはせ給ふはうたかいをのこしていかて

か御み、につたへ給ふとはのせたる也

(注12)  
(二三七)

『花鳥余情』も、源氏と紫の上が合わせたのが共に侍従と黒方であり、いずれも仁明帝御禁制の方であると見ている。この二つの方が仁明帝から皇子の本康親王に伝えられたと考えているのであろう。しかし、源は同じであつても、後に少しずつその人の調合の加減によつて変わってくるものであるとも言っている。従つて、両者の方を全く同じものとは考えていない。即ち、親王の方は、帝の方を受け継いでいてもそれ相應の独自のものと見ているのであろう。この点は『河海抄』も同様である。しかし、御禁制は生きているので、親王の方を伝えた女の紫の上のが正統であり、源氏は男であるから正統の伝へではないと言うのである。そうであるならば、帝から皇子である親王に伝えられることはその御禁制に背くのではないとも言える。この点は考慮していないか、別の問題と考へているのであろうか。

『花鳥余情』は、これを父親王と娘の間のことと考へて、八条の式部卿を紫の上の父式部卿の宮に准え、父式部卿の宮から娘の紫の上に伝えられたと考へたのであろう。

なお、紫の上が仁明帝の方を受け継いでいると見られる本康親王の方を伝えているのに対して、明石の御方の方は薫物の判定のところに次のようにある。

冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに、消たれんもあいなしと思ひて、薫衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠朝臣の、ことに選び仕うまつれりし百歩の方など思ひえて、世に似ずなまめかしさをとり集めたる、心おきてすぐれたりと、いづれをも無徳ならず定めたまふを、「心ぎたなき判者なめり」と聞こえたまふ。

(四〇一)

この「前の朱雀院」を現代の注は宇多上皇と取り、写したのは物語の朱雀院であるとしている。『源氏物語事典上巻』では、写したのは「史上の朱雀院」とし、さらに次のように「前の朱雀院」を宇多院と取るべきことを説いている。

しかし、物語の朱雀院は、仮作人物であると同時に、その準拠を史上実在の朱雀院、いわゆる承平の帝に求めるのが旧注の所説であり、裏付けとなり得る一二の材料もあつて、この準拠説は一応認め得る。さすればこの「さきの朱雀院」を、承平の帝に持つて行く必要はなく、宇多院として論理的に落ち着く。

(二二五)

これに対して『河海抄』には、

古今集に朱雀院とあるは亭子院也仍此さきの朱雀院も寛平の御事たるへき歟しかれとも若此物語の朱雀院よりさきといふ心歟承平の聖代合香を好しめ給よしみえたり

公忠朝臣号滋野井弁 右大弁従四位下 天曆二年十月廿八日卒六十 光孝天皇御孫 大藏卿国紀子

高名薫物合好手也云々

延喜天慶間右大弁公忠朝臣藏人所小舍人大

和常生相並奉合香之役

(四四四)

とあり、史上の朱雀帝と取り、合香を好まれたことを指摘している。また、源公忠は醍醐・朱雀兩帝の時代に大和常生と並んで「合香之役」を務めたという。これは公忠が朱雀帝に仕えたことを重視していると言えよう。このことは『薫集類從』上の「侍從」に大和常生を上げるところで、「件常生。延喜聖代与公忠朝臣同時相並。奉合香之事者也。」(五三二)とある。『花鳥余情』もほぼ同様であるが、前朱雀院の方と公忠朝臣の方との關係について、二つの説を挙げている内の一つに次のように言っている。

一には前朱雀院は承平の御門の御事也 公忠朝臣もその世につかへてあはせかうに達したる人也 故に朱雀院の薫衣香といふはすなはち公忠朝臣のたてまつれる方とおなし事なり 百歩のほうというはおほよそ香氣の遠く聞ゆるをもて百歩香といふへし 一方にさたむへからさる心也。

(二四〇)

朱雀院の薫衣香と公忠朝臣の献上した方とは同じであると言う。この場合、前朱雀院の方を写したのは公忠朝臣ということになるうか。



これに対して、『玉の小櫛』は「うつさせたまひて」を問題にして、「うつさせ給ひてとは、宇多ノ御門の御方を、延喜承平などの御代に、うつさせ給ひて、公忠ノ朝臣の、ことにえらべるにこそあれ、そのうへ此物語の朱雀院、すなはち承平ノ帝に准へたるを、前の朱雀院と申すべきよしなし」(第四巻・四四五―六<sup>(注13)</sup>)と言う。しかし、これでは薫物における前朱雀院と公忠との緊密な関係は出てこないであろう。

すぐれた薫衣香の方である前朱雀院(承平の帝)の方を写し、公忠が特に選んで調合し前朱雀院に奉ったのが百歩の方というのであらう。諸注、百歩の方は薫衣香の調合法の一つと見ている。これは元が前朱雀院の薫衣香にあり、公忠のはそれから出た一つの変容である百歩の方ということであらう。「うつさせたまひて」と最上敬語を用いたのは、入り組んだ文脈の中で明石の御方と区別するためと考えられる。紫の上の伝えた八条の式部卿の方が仁明帝の方を受け継いでいるのと同様に、公忠朝臣の方は前朱雀院の方を写し、独自の方になっているのである。そして、八条の式部卿の方が古い時代の方であるのに対して、公忠朝臣の方は新しい時代の方として上げられたのであらう。

### 三 仁明帝と薫物

『本朝皇胤紹運録』<sup>(注14)</sup>、『続日本後紀』<sup>(注15)</sup>によれば、第五十四代仁明帝は、嵯峨帝第二子、諱は正良、治世は十七年。母は、内舍人贈太政大臣正一位橘清友の娘太皇太后嘉智子である。弘仁元年(八一〇)に誕生、同十四年(八二三)四月十八日に十四歳で立太子、八月一日に元服、天長十年(八三三)二月二十八日に二十四歳で受禪、三月六日に即位、十一月十五日に大嘗会、嘉祥三年(八五〇)三月十九日に落飾、二十一日に四十一歳で清涼殿において崩じた。山城の国深草の山陵に葬り、深草帝と号した。皇子に道康親王(第五十五代文徳天皇)、時康親王(第五十八代光孝天皇)、

第五皇子本康親王の他、五親王、九内親王、五源氏、二朝臣がある。<sup>(注16)</sup>

仁明帝の人となりについて、崩御後の『続日本後紀』嘉祥三年三月二十五日の条（『日本紀略』<sup>(注17)</sup>）にもある（『日本紀略』）には次のようにある。

帝叡哲聰明。苞<sup>レ</sup>綜衆芸<sup>二</sup>。最耽<sup>二</sup>經史<sup>一</sup>。講誦不<sup>レ</sup>倦。能練<sup>二</sup>漢音<sup>一</sup>。弁<sup>二</sup>其清濁<sup>一</sup>。柱下漆園之說。群書治要之流。凡厥百家莫<sup>レ</sup>不<sup>二</sup>通覽<sup>一</sup>。兼愛<sup>二</sup>文藻<sup>一</sup>。善<sup>二</sup>書法<sup>一</sup>。學<sup>二</sup>淳和天皇之草書<sup>一</sup>。人不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>別也。亦工<sup>二</sup>弓射<sup>一</sup>。屢御<sup>二</sup>射場<sup>一</sup>。至<sup>二</sup>鼓琴吹管<sup>一</sup>。古之虞舜。漢成兩帝不<sup>二</sup>之過<sup>一</sup>也。留意<sup>二</sup>醫術<sup>一</sup>。尽諳<sup>二</sup>方經<sup>一</sup>。當時名醫不<sup>二</sup>敢抗論<sup>一</sup>。<sup>(注18)</sup>

衆芸に通じ、最も經史に没頭していたこと、併せて詩文を愛し書法をよくした。また弓射が得意であり、管絃、醫術においては及ぶ者がないという。しかし、薰物については衆芸に含まれるかも知れないが、触れられていない。国史のような公的な文章に載せるべきものではないのであろうか。

『原中最秘抄』によれば、仁明帝は薰物合わせの高名人物の筆頭に上げられている。<sup>(注19)</sup>

#### 薰物合高名人数

仁明帝<sup>承和御門是也</sup> 朱雀院 白河院 八条式部卿宮 同孫子左大将保忠 四条大納言公任 右大弁宰相公忠 内蔵頭

兼房朝臣 大江千里 故皇后宮九条右大臣女 典侍滋野直子朝臣 藏人所小舎人大和常生<sup>ツネキフ</sup> 寛教大僧都<sup>(注20)</sup> (五六三)

仁明帝は、薰物合わせにおいて高名であるとともに、その始原的存在と考えられていたのであろう。朱雀院は承平の帝のことであらう。八条の式部卿宮（本康親王）、右大弁宰相公忠の名も上がっている。この四名はいずれも梅枝の巻に名が出ていた人物である。

仁明帝の薰物としては、先述のように、黒方と侍従について、これを男に伝えてはならないとする帝の仰せ事がある。従って、帝自身の黒方と侍従の二つの方があつた。

『薫集類抄』上には、諸方を上げ、その名人を時代順に並べているが、帝の名が付いた方として二つある。黒方の次に「坎方。或注黒方。」を上げ、そこに「承和秘方」がある（『源氏物語事典上巻』では黒方の項に入れる）。最初の見出しに「坎方」が上げてあるので、「坎方」と見るべきであろう。

承和秘方

沈四両

丁子二両。

麝香二分。

甲香二両二分。

白檀一分。

薫陸一分。已上大。

(五三八)

これは同抄下の「和合次第」のところで、「八条大將」(八条式部卿の宮の孫、藤原保忠)の名を上げ、「承和秘方同之」(五四八)としている。このような血縁による伝え及び「秘方」とすることから見ると、帝自身によつて調合された方なのであろう。また、同抄上に「承和百歩香」<sup>(注2)</sup>がある。

承和百歩香

此方出レ自ニ四条大納言家。大江千古所レ上耳。

(略)

右十一種。搗飾。蜜和之。於ニ瓷器中ニ盛埋。經三三七日ニ取焼。百歩之外聞レ香。

(五三八)

これは、同抄下の「埋日数。付埋所。」のところにもある。この「承和百歩香」は四条大納言家から出、大江千古が献上したものであるとする。四条大納言については「梅花」のところ、

梅花

四条大納言

源定。正二位大納言左近大將。嵯峨天皇源氏。

とあり、嵯峨帝皇子源定である。『本朝皇胤紹運録』に、

源定

大納言正三位左大將。号ニ四条。嘉祥三出家。母百濟氏。

〔頭〕

三代実録。貞觀五年(八六三)正月三日。大納言正三位兼行右近衛大將源朝臣定寛。年四十九

(三八)

とあるように、「正三位」が正しいが、定は弘仁五年(八一四)の生まれとなり、仁明帝よりも四歳年下である。『薫集類抄』上の「黒方」、その他に名が出る。薫物においては一家をなした人物と考えられる。「承和百歩香」は、或いは仁明帝の指示を受けて定が調合したことに由来し、それが大江千古の家に伝えられてきたものと考えられることもでき

る。仁明帝の周辺にはこのように有力な薫物の達人がいるので、相互に影響を及ぼしたものと推測される。

### 三 仁明帝の方の繼承

先の「薫物合高名人數」には、仁明帝の子孫として、皇子の本康親王、親王の孫、藤原時平と本康親王女廉子女王の子左大将藤原保忠が上げられている。

仁明帝と本康親王との薫物の上での繋がりとしては、先に述べたように、親王の侍従と黒方において帝の仰せ事が受け継がれているので、薫物自体についても帝から親王への伝えがあつたものと考えられる。

『日本三代実録』貞観六年（八六四）二月二日の高橋文室麻呂卒伝によれば、文室麻呂は、嵯峨太上天皇崩後仁明帝に仕え、「有<sub>レ</sub>勅奉<sub>レ</sub>教<sub>二</sub>鼓琴於諱<sub>天皇</sub><sup>光孝</sup>親王。本康親王。」（二三〇）と、帝の命を受け、本康親王にも「鼓琴」を教えている。しかし、薫物についてはそのような記述が見られない。

『薫集類抄』上では、上記のように侍従と黒方に帝との繋がりが見られる外は、「梅花」、「薫衣香一名鉢身香」のところに八条宮の名がある。その「梅花」では、「八条宮」として、「本康。一品式部卿。仁明天皇第五親王。母從四位上滋野繩子。貞主女也。」（五二六）とある。親王の母滋野繩子の父貞王については、同じく「梅花」に、「滋宰相。

滋野貞主。參議宮内卿正四位下。尾張守家譯子。」（同）とあり、「侍従」（上巻裏書にもある）、「黒方」にも名を上げられているので、やはり達人として知られていたと見られる。このように見ると、親王に香を伝えたのは、帝だけではなく、母繩子との関係でその父貞主からの伝えをも考えなければならぬであろう。仁明帝御禁制の方を醍醐帝に献上した典侍滋野直子も貞主の子孫であろうか。そうすれば直子も貞主の方を伝えている可能性がある。

また、「薰衣香一名軀身香」では三つの方の中で筆頭に上げられている。他に、親王は薰衣香の一つである「増損薰衣香」を奉っているが、これは親王の奉ったのが唯一の方である。親王は薰衣香において特色を発揮したと考えられる。さらに「百和香」については、「寛平六年（八九四）九月十日。八条一品宮於御前二写一給百和香方」也。亦称黑方。是誤歟。「（五三八）という注記がある。「百和香」とは侍従の一つとも考えられる。これは宇多帝の方を写したのか、それまでに伝えられていた方を写したのかはよく分からないが、これも他の方は上げていないので極めて珍しいものであったと見られる。また、親王が活躍した時代の一つが宇多帝の時代であることが分かる。

次に、本康親王と孫である藤原保忠との薫物の上での繋がりとしては、同じく『薰集類抄』上の「侍従」に、

八条大将。宇治関白用此方。注：頼通

大将者。八条式部卿親王之孫也。然則伝来方可同承和方。而有相誤。甚可疑之。（五三二）

とあり、また、「黒方」のところに、「八条大将。（略）可疑之由。委見侍従。」（五三四）とあって、不審を抱きながら、保忠は親王の孫なので仁明帝の方を伝えている筈であると見ている。このように侍従と黒方は、仁明帝から本康親王へ、さらにその孫、藤原保忠へと伝わって行った可能性がある。（注）さらに同抄下の「和合次第」のところでは、

八条大将。承和秘方同之。沈。丁。甲。蕉。麝。

のように、保忠の和合の仕方が承和秘方に同じとある。親王と保忠との繋がりは、同抄上の「梅花」に「八条大将」を上げ、「藤原保忠。大納言正三位右近衛大将兼陸奥出羽按察使。左大臣時平一男。母本康親王女従四位上廉子女王」（五二七）とあることから、親王の娘である廉子女王との婚姻によって保忠に伝わったと考えられる。また、「後伏見院宸翰薫物方」にも、「八条の<sup>保忠</sup>大将は式部卿の宮のまご也。さてぞすぐれてあはせける」（五六九）とある。

なお、『薰集類抄』上巻裏書には、「梅花。小一条皇后。公任卿和香之伝不見。但康義公者。八条大将養子也。

用之。所習伝歟。亦清慎公殊和「合薰物」。若其伝歟。」(五五九) と言うように、頼忠が保忠の養子なので、公任は父頼忠から保忠の方を習い伝えたかとしている。『尊卑分脈』にも「頼忠、按補任藤保忠卿為子」(第二篇二頁頭注<sup>(註)</sup>)とある。公任は紫式部と同時代の人である。

一方、本康親王の孫には平隨時があり、『薰集類抄』上には、これも薰衣香の一種である「曾昌薰衣香」を献じている。また、同抄下の裏書に「和合次第下」としてその達人について次のように述べている。

凡合香法。管窺輩多称「其能」。然頗得「其道」者。公忠朝臣。隨時朝臣等也。公忠者伝「典侍直子」称「雄」。隨時者以「八条李部王」之孫「得」名。此兩人其流雖「同」。其派猶異。口説相違。手方相乖。 (五六〇—一)

隨時は本康親王の孫であることによって名を得たと言っている。従って、随時も親王の方を伝えていると見られよう。随時は『紹運録』によれば親王の一男雅望王の二男である。村上帝の天曆七年(九五三) 参議正四位下、太宰大貳となり十二月に卒している。<sup>(註)</sup>

次に、明石の御方が合わせた、すぐれた薰衣香である朱雀院の方を写して、公忠が特に選んで調合し奉った百歩香の、朱雀院と公忠について見ておきたい。

まず、『薰集類抄』上では、朱雀院は「侍従」のところに、「朱雀院。東三条院用之。(略) 右方。自「天曆御時」所「令」伝給「也」。(五三二) とある。また、朱雀院は「黒方」でも名を上げられ、「東三条院同之」。(五三四) としている。朱雀院の侍従の方は村上帝の時から伝えられたとするので、朱雀院は一代前の帝と考えるのが順当であろう。朱雀院が侍従と黒方で知られていることからしても、先の典侍直子が仁明帝の仰せ事のある侍従と黒方を醍醐帝に献じ、それが御子の朱雀院に伝わったとも考えられる。ただ、梅枝の巻では薰衣香となっているので、独特の香の創始者としているのであろう。

次に、源公忠は「梅花」のところに、「右大弁公忠。從四位下大藏卿。國紀男。仁和源氏也。」(五二六)とある。(注27)母の典侍滋野

直子は、先の仁明帝の仰せ事のある侍従と黒方を醍醐帝に献じた人物であると考えられる。直子は先の「薫物合高名人數」にも出ている。公忠はその母直子の方を伝えているのである。先にもあったように、公忠が達人として名を馳せたのは母直子に負うところが大きい。このことから典侍直子は仁明帝の仰せ事のある方を伝えていて、それが子の公忠にも伝わったとも考え得る。『薰集類抄』が公忠と随時について、「此兩人其流雖同。其派猶異。」と、その流れが同じであるとするが、それは源が仁明帝若しくはその方を伝えた本康親王にあることを言っているのであろう。

『後伏見院宸翰薫物方』は、

焼物よくあはせける人は。きんたゞの弁はないしのすけの伝へ也。ゆきときは八条の式部卿の宮のそん也。是ふたりなん承和のふかき風に匂へると。ほうに申たるは。随時

(五六九)

公忠と随時の源は仁明帝にあると言っている。

一方で、公忠が滋野直子の子であることは、直子が貞主の子孫であればその方を伝えているので、公忠も貞主の方を伝えている可能性があることを意味する。また、『河海抄』の言う醍醐・朱雀帝に合香の役を以て仕えたことからすれば、梅枝の巻のように朱雀院からの伝えもあり得よう。朱雀帝には仁明帝以来の方が伝えられていると考えられる。『薰集類抄』上は、「荷葉」のところに公忠朝臣の名を上げ、「天曆六年二月廿一日甲午進之。」(五二九)と、村上帝に献じたとしている。

同抄上では、公忠は「梅花」、「荷葉」の外に「侍従」、「黒方」、「薫衣香一名躰身香」のところに、「洛陽薫衣香」には「出淳和院」。但公忠朝臣所献也(五三七)とある。梅枝の巻にある、朱雀院の薫衣香を写して公忠が選び献じた百歩香とあるのも薫衣香の一種であるのを見ると、薫衣香を得意とした公忠ゆえと考えられる。また、公忠が香

を帝に献じているところも重なっている。なお、「薫物合高名人数」に名の出た観教大僧都は、「黒方」のところに名があるが、そこには「延暦寺。公忠弁息。三条院護持僧」(五三五)とあり、公忠の子である。このように典侍滋野直子から源公忠、観教大僧都と、三代にわたって薫物の名人が輩出している。

### 終 わ り に

梅枝の巻の薫物合わせにおいて、源氏が伝えた仁明帝御禁制の二つの方と、紫の上が伝えた本康親王の方とは古い時代の方である。それに対して、朱雀院のすぐれた薫衣香を写し、公忠朝臣が調査して奉った百歩の方は新しい時代の方である。また、仁明帝や本康親王は宮廷において薫物が盛んになっていく始発期の人物であり、朱雀院や公忠朝臣はその中興期の人物であると言えよう。そして、特に仁明帝の方は本康親王だけでなく、朱雀帝や公忠朝臣にも伝わった可能性がある。さらに主として血縁を介して後代にも伝えられていった。則ち、宮廷の薫物において全ての源は仁明帝にあり、またその影響もまことに大きいと考えられる。梅枝の巻の薫物合わせはこのような仁明帝から始まる宮廷の薫物の歴史を反映していると考えられる。そして、仁明帝及びその時代は、桐壺の帝と更衣の物語の准拠というだけでなく、薫物においても指標として位置付けられていると言いうことができる。

(注1) 金田元彦氏著『源氏物語私記』(平成元年十二月 風間書房) 二四頁。

篠原昭二氏著『源氏物語の論理』(平成四年五月 東京大学出版会) 三〇頁。

(注2) 『源氏物語』本文の引用は、『日本古典文学全集 源氏物語』(小学館)により、冊数と頁数を示す。以下同じ。



〔注 3〕全集、評釈、集成、新大系、『源氏物語事典上巻』『そうわ』の項等。

〔注 4〕『河海抄』本文の引用は、玉上琢弥編『紫明抄河海抄』により、頁数を示す。以下同じ。

〔注 5〕『源氏物語大成巻七』所収。なお『源中最秘抄』は、「甲香を例のことくして蜜を竿あまたしほぬれ黒くあふる事なかれ異なる秘香たるよし承和の勅なり」（五七一頁）と、「異なる秘香」とし、「不伝男」という御禁制とはしていない。

〔注 6〕『薫集類抄』の引用は、『群書類従』第十九輯により、頁数を示す。以下同じ。

〔注 7〕『源氏物語事典上巻』『そうわ』の項、二八六―七頁。

〔注 8〕『後伏見院宸翰薫物方』の引用は、『群書類従』第十九輯により、頁数を示す。以下同じ。

〔注 9〕注 3 の全集以下の注の外、『源氏物語事典上巻』『そうわ』及び「みかはみづ」の項。

〔注 10〕『源氏物語評釈』第六巻。『源氏物語事典上巻』『はちでうのしきぶきやう』の項。

〔注 11〕拙稿「八条の式部卿について」（広島女学院大学 国語国文学誌）第二十七号 平成九年十二月

〔注 12〕『花鳥余情』の引用は、『源氏物語古註釈叢刊第二巻』により、頁数を示す。以下同じ。

〔注 13〕『本居宣長全集』により、巻数と頁数を示す。

〔注 14〕『群書類従』第五輯による。

〔注 15〕『新訂増補国史大系 続日本後紀』による。

〔注 16〕注 7 の書に略伝がある。なお、同書は「源氏、男五人、女二人」（二八六頁）とする。

〔注 17〕『新訂増補国史大系 日本紀略 第二』による。

〔注 18〕注 15 の書により、頁数を示す。

〔注 19〕注 7 の書に同じ。

〔注 20〕注 5 の書により、頁数を示す。

〔注 21〕なお、承和百歩香については、『河海抄』が絵合の巻の、朱雀院が前斎宮の入内にあたって贈り物をするところ、「薫衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで」（絵合 二・三六〇）に、「又百歩外とは承和百歩方の心也」（三

四三)としている。特定の香に限定している訳ではない。

〔注22〕『群書類従』第五輯により、頁数を示す。

〔注23〕『新訂増補国史大系 日本三代実録 前篇』により、頁数を示す。

〔注24〕なお、『原中最秘抄』下は仁明帝御禁制の二つの方のところで、「又云梅花八葉梅方三枝之方（略）黒方子細梅花に同之（略） 右

両種の方は八条式部卿親王の孫左大将保忠卿被<sub>レ</sub>相伝<sub>二</sub>之方也然者彼幕下は竹園之孫也云々 以是可准孫王歟猶可勘之（略）」（五七〇）としている。これは後で侍従と黒方のこととすべきであると言っているが、同様に仁明帝の方が本康親王を介して親王の孫、保忠に伝えられたと考えている。

〔注25〕『新訂増補国史大系』第五十九巻による。

〔注26〕『群書類従』第五輯 四十六頁。

〔注27〕『三十六人歌仙伝』（『群書類従』第五輯）にも「従四位下源朝臣公忠。（大藏卿国紀二男。光孝天皇孫）」（三七八）とある。